



大会式典



基調講演

～花は人をつなぐコミュニケーションツール～

NPO 法人 Green Works 代表理事 牧野ふみよ氏

基調講演では、NPO 法人 Green Works 代表理事の牧野ふみよ氏が「全国を駆け回る私が見たコミュニティガーデンのヒミツ」と題して講演を行いました。

牧野氏は全国各地のコミュニティガーデンの事例を紹介しながら、「花は人と人をつなぐ最強のコミュニケーションツール」であると述べました。花を育てることをきっかけに会話が生まれ、仲間が増え、やがて地域への愛着や誇りへと発展していくことが、多くの実践事例とともに紹介されました。



また、牧野氏は「花が好きな人が好き」という自身の活動理念を紹介しながら、花のまちづくりは景観を美しくするだけでなく、花を通じた人と人とのつながりを育む活動であると語りました。全国各地を訪れる中で、活動が長く続いている地域には、人が集まり、楽しみながら関われる仕組みが共通していることも紹介されました。

さらに、近年は資源循環や生物多様性といった環境課題への対応も重要なテーマとなっており、これからのコミュニティガーデンには「楽しさ」に加え、「地域資源の循環」や「生きものにやさしい環境づくり」といった視点も求められるとの提言がありました。

講演を通じて、花のまちづくりは花壇や景観を整備する活動にとどまらず、人と人をつなぎ、地域の未来を支えるコミュニティを育てる取り組みであることを改めて学ぶ機会となりました。

事例発表

～次世代へ受け継がれる花文化～

「地域とともに歩む私たちの活動について」

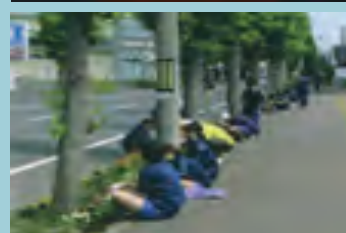
恵み野中学校 生徒会

恵み野中学校では、開校以来 37 年間にわたり、地域と協働した花壇づくりが続けられています。

環境委員会が中心となって花壇のデザインを考え、全校生徒が植栽や維持管理に参加するほか、地域住民や PTA と連携しながら活動を展開している事例が紹介されました。

発表では、「花を育てることは人を育て、まちを育てること」という言葉が印象的でした。

花の活動を通じて地域への愛着や誇りが育まれ、次世代へ継承されている姿を見ることができました。



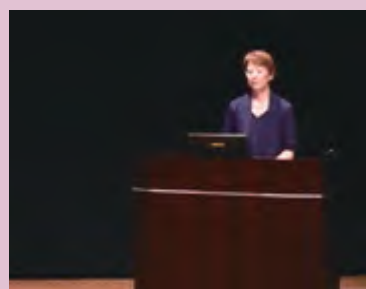
「心豊かに暮らせる美しい花のまちをめざして」

東神楽町 建設水道課 花のまちづくり推進室 滝澤ゆかり氏

東神楽町からは、市民ボランティアによる循環型の花のまちづくりが紹介されました。

除草した草や花がらを現地で土に還すことでゴミを減らし、環境負荷や維持管理コストの軽減を図るとともに、人にも環境にも優しい活動を実践しています。

また、作業後の交流や冬季の勉強会など、人と人とのつながりを大切にした活動運営が行われていることも紹介されました。



「持続可能なまちづくりをめざして」

恵庭市 花と緑・観光課

恵庭市からは、「持続可能なまちづくりをめざして」と題して、60年以上続く花のまちづくりの歩みと今後の展望が紹介されました。

特に印象的だったのは、花のまちづくりを次世代へ継承するための仕組みづくりです。現在、恵庭市では「花と緑の文化センター構想」を進めており、市民活動への支援、人材育成、情報発信などを担う中間支援機能の整備を目指しています。

美しい景観を守るだけでなく、それを支える人材や仕組みを育てていこうとする姿勢が強く感じられました。



トークセッション

～花がつなぐ多様な人々～

トークセッションでは、市民活動、福祉、多文化共生など様々な分野で活動する関係者が登壇し、「いま、花のまちづくりの未来を話そう」をテーマに意見交換が行われました。

議論の中では、花の活動は景観づくりだけでなく、高齢者の居場所づくりや地域コミュニティの形成、外国人住民との交流促進など幅広い効果を生み出していることが紹介されました。

花が世代や立場、文化の違いを超えて人をつなぐ共通のコミュニケーションツールであることを改めて感じる内容でした。

モデレーター

北海道大学
大学院農学研究院 教授

愛甲 哲也 氏

パネリスト

北恵庭市フラワーマスター協議会
はなふるガーデナー

土谷 美紀 氏

特別パネリスト

NPO法人
Green Works 代表理事

牧野 ふみよ 氏

パネリスト

生涯学習
コーディネーター

水野 みどり 氏

パネリスト

生活支援コーディネーター
市民活動コーディネーター

小隅 麻美 氏



現地見学会

～現地で体感した「花のまち恵庭」～

大会2日目には、花の拠点「はなふる」、恵み野地区の花さんぽストリート、オープンガーデンなどを巡る現地見学会が開催されました。

花の拠点「はなふる」は、恵庭市が長年培ってきた花文化の象徴として整備された施設であり、花のまちづくりを未来へ継承するための重要な拠点として位置付けられています。

視察では施設が7つのテーマガーデンで構成されていることや、その景観と設計理念を維持するため、ガーデナー、花苗生産者、造園関係者など多様な専門家が連携して管理運営を行っていることが紹介されました。整備当初のコンセプトを継承する仕組みが構築されている点は大変印象的でした。

また、恵み野地区の「花さんぽストリート」では、地元商店会や住民、ボランティア団体、地域の小中学校が協働して維持管理を行っており、花を通じた地域ぐるみのまちづくりが実践されていました。花のある美しい景観だけでなく、それを支える多様な主体の連携が恵庭市の大きな魅力であると感じました。



花の拠点「はなふる」



花さんぽストリート



オープンガーデン

今回の大会では、花のまちづくりとは、人と人とのつながりを育み、地域への愛着や誇りを生み出しながら、次世代へと受け継いでいく取り組みであることを改めて学びました。

大会パンフレットの「恵庭市の紹介」には、

「ガーデンシティ えにわ」一。花と緑に包まれた風景、自然に寄り添う暮らし、そしてまちをより良くしようとする人々の営み。これらが重なり合い、訪れる人にも暮らす人にもやさしく響く、恵庭らしい空気感をつくり上げてきました。ようこそ、花のまち えにわへ。

と記されています。

この一文は、花のまち恵庭がこれまで築き上げてきたもの、そしてこれからも守り育て、未来へつないでいきたいという思いと、「継続は力なり」を体現してきた恵庭市だからこその言葉そのものであると思います。

全国大会への参加を通じて、駅に降り立った瞬間から目に飛び込んできた、道路や公園だけでなく市民の住宅の庭先まで花に彩られた風景からは、市民、行政、産業をはじめとする多くの人々が、それぞれの立場で果たすべき役割に真摯に向き合い、長年にわたり積み重ねてきた歩みが強く伝わり、深い敬意を抱きました。

また、大会で紹介された学校の取り組みや市民活動、花の拠点「はなふる」をはじめとする継承の仕組みからは、その歩みが今もなお大切に受け継がれ、これからも次の世代へとつながっていくであろうことを感じました。

そして私が感じた「恵庭らしい空気感」。それは、花に彩られた景観の背景にある人々の地域や花への誇りや愛着、長年の歩みと積み重ね、そして未来へつないでいこうとする思いが、まち全体に息づいていることでした。